

嵌頓包茎の診断と治療

金 藤 博 行, 星 清 継, 今 井 克 忠

はじめに

嵌頓包茎 (paraphimosis) とは、仮性包茎である包皮を翻転した後、包皮輪が狭いために元に戻らなくなった状態をいう。包皮輪によって絞扼されるため包皮は循環障害に陥り、急速に浮腫が出現、放置すれば包皮の壊死を来す場合もある。1) 乳幼児では陰茎の勃起時に包皮が翻転した、2) 若年者では自分で包皮を翻転した後元に戻さなかった、あるいはそのまま勃起したため元に戻らなくなった、3) その他導尿、尿道カテーテル留置などで包皮を翻転した後元に戻さなかった、などが契機となって発症する。羞恥心のため受診しない、医療従事者が嵌頓包茎に気付かないなどが原因で、診断、治療が遅れ外科的処置が必要となることがある。症例を呈示し診断と治療について述べる。

症 例

患者：12 歳，男性

主訴：陰茎の疼痛・腫脹

現病歴：自分で陰茎をさわっていたところ疼痛が出現。その後包皮の腫脹が見られるようになった。2 日後母親に付き添われて近医皮膚科を受診し、“かぶれ”と言われ軟膏を処方された。5 日後疼痛が強くなり救急診療所受診、消炎鎮痛剤を投与されたが症状は軽快せず。3 日後（発症より 10 日後）当科を受診した。

現症：包皮輪によって包皮が絞扼され、包皮および亀頭部に著明な浮腫を認めた（図 1）。絞扼部位の皮膚は色調が悪く一部器質化していた。まず用手整復を試みたが、嵌頓後時間が経過して浮腫が強くと疼痛も強いため緊急手術を行った。

手術所見：全身麻酔下に腫脹した包皮を圧迫し浮腫を軽減させると、包皮を元に戻すことができた（図 2）。しかし、包皮輪は狭く炎症による発赤や皮膚の裂傷が見られたため、この部分を含めて包皮環状切開術を行った（図 3）。

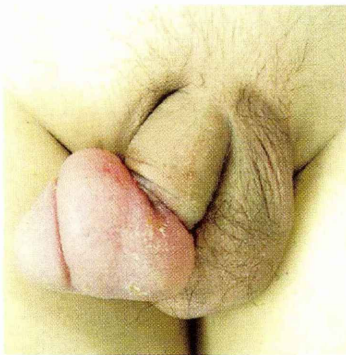


図 1. 初診時。包皮輪によって包皮が絞扼され、包皮・亀頭の浮腫が著明。

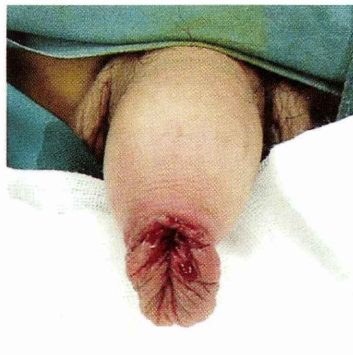


図 2. 整復後。浮腫は軽減したが、包皮輪部の皮膚に炎症と裂傷が見られる。

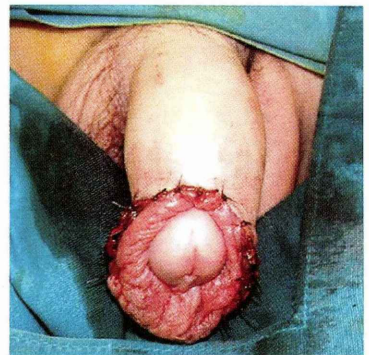


図 3. 環状切開術後。

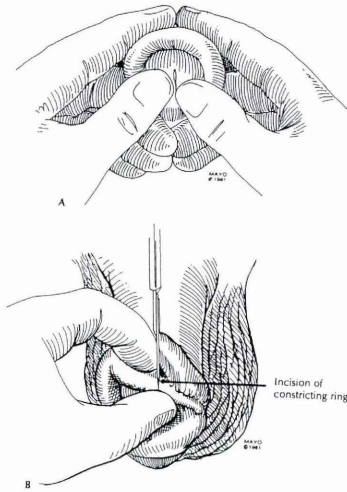


図4. 治療 (Levy)¹⁾。(A: 徒手整復。B: 絞厄部の背面切開)

診 断

包皮輪による絞厄と包皮の浮腫を認めれば診断は容易である。包皮が翻転しているので通常は陰茎亀頭部が明らかになっている。乳幼児では、包皮が柔らかいため包皮の浮腫が著明となって亀頭部が見えない場合もある。

鑑別診断として、1) 包皮亀頭炎、2) 心不全、腎不全、低蛋白血症による浮腫、3) 悪性腫瘍等による骨盤腔内リンパ管閉塞によるリンパ浮腫、4) 真性包茎に発症した陰茎癌、などがあげられる。いずれも包皮の浮腫が著明になる場合があるが、包皮輪による絞厄は見られず鑑別は容易である。

治 療

診断がつけば速やかに包皮を元に戻し循環障害を解除することが必要である。発見が早ければほとんどの症例で手動的に整復することが可能である。

1) 徒手整復法(図4A)。浮腫が軽度の場合は、両方の示指と中指で陰茎を挟み、親指で亀頭を押

し込むようにすると腫脹した包皮に吸い込まれるように亀頭が戻る。浮腫が高度の場合は、整復を試みる前に包皮にガーゼや弾性包帯を軽く巻いて圧拍し浮腫を軽減させた後に整復する。通常麻酔を必要としないが、疼痛が強い場合は陰茎根部麻酔あるいは仙骨麻酔が必要となる。皮膚の器質化がなければ浮腫は速やかに改善するが、乳幼児ではその間の再発予防のため包皮先端に紙絆創膏を貼り、包皮が翻転しないようにしておくといよい。もともと包皮輪が狭いので、仮性包茎に対する待期手術が適応となることが多い。

2) 外科的処置(図4B)。用手整復が出来ない場合、皮膚の色調が悪い場合は外科的処置が必要となる。陰茎背面で包皮輪の皮膚を縦切開し絞厄を解除すると包皮を戻すことが出来る。包皮の浮腫や皮膚障害の程度によって、そのまま包茎環状切開術を行うか、浮腫、炎症の消退を待つて手術とする。

3) 予防。仮性包茎の患者では、導尿、尿道カテーテル留置、陰茎診察などのために包皮を翻転し亀頭を露出した後は必ず包皮を元に戻すことが重要である。

ま と め

嵌頓包茎の知識があれば診断は容易で、診断が早ければほとんどの症例で徒手整復が可能である。症状が急激に現れ救急外来を受診することが多いが、医療従事者が気付かなければ診断が遅れる。判断に迷ったら直ちに泌尿器科医の診察を受けることが必要である。

文 献

- 1) Levy JB et al: Circumcision. Glenn's Urologic Surgery, Fifth edition (Graham Jr SD ed.), Lippincott-Raven Publishers, Philadelphia, pp 897-901, 1998